

第4回山梨県高等学校審議会

日 時 平成23年11月22日（火）

場 所 恩賜林記念館 東会議室

山 梨 県 教 育 委 員 会

審 議 会 次 第

1 開 会

2 会長あいさつ

3 議 事

中高一貫教育の必要性に関する意見の整理について

4 閉 会

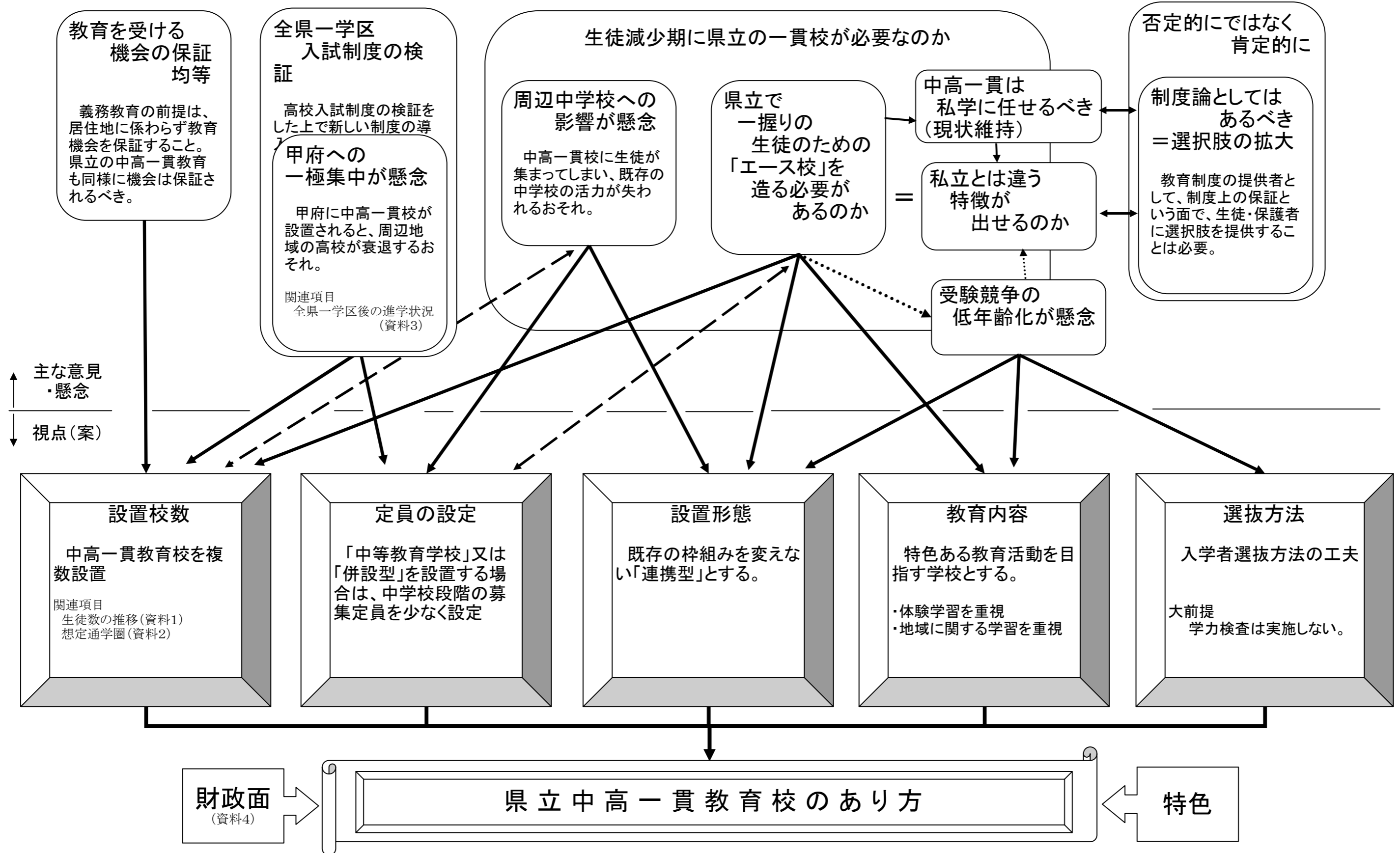
山梨県高等学校審議会 委員名簿

(五十音順)

平成23年11月22日現在

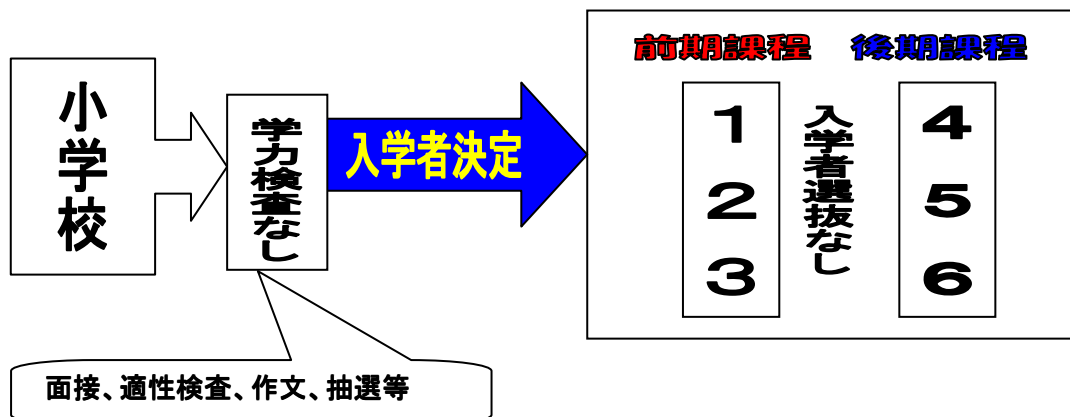
	氏 名	役職等	備 考
1	秋山 教之	山梨県高等学校長協会会長	
2	石川 恵	弁護士	
3	小田切 禎子	社会福祉法人千歳会 特別養護老人ホーム花菱荘施設長	
4	梶原 正孝	山梨県公立小中学校長会副会長	
5	岸本 千恵	NPO法人山梨県ボランティア協会事務局長	
6	梶 謙一	山梨県PTA協議会会長	
7	河野 木綿子	山梨県高等学校PTA連合会副会長	
8	輿水 豊	山梨県都市教育長会会長	
9	五味 武彦	公立大学法人山梨県立大学理事	
10	島村 茂幸	社団法人日本青年会議所関東地区山梨ブロック協議会会長	
11	清水 義富	駿台甲府高等学校PTA副会長	
12	手塚 茂松	山梨県公立小中学校長会会長	
13	寺崎 弘昭	国立大学法人山梨大学教育人間科学部長	
14	野村千佳子	山梨学院大学経営情報学部教授	
15	原 功三	東京エレクトロン山梨株式会社取締役会長	
16	清水 學	山梨県市町村教育委員会連合会会長	
17	山口 博伸	駿台甲府中学、高等学校校長	
18	依田 正司	山梨県中小企業団体中央会常務理事	

「必要性」をめぐる主な意見や懸念に対する今後の協議における視点(案)



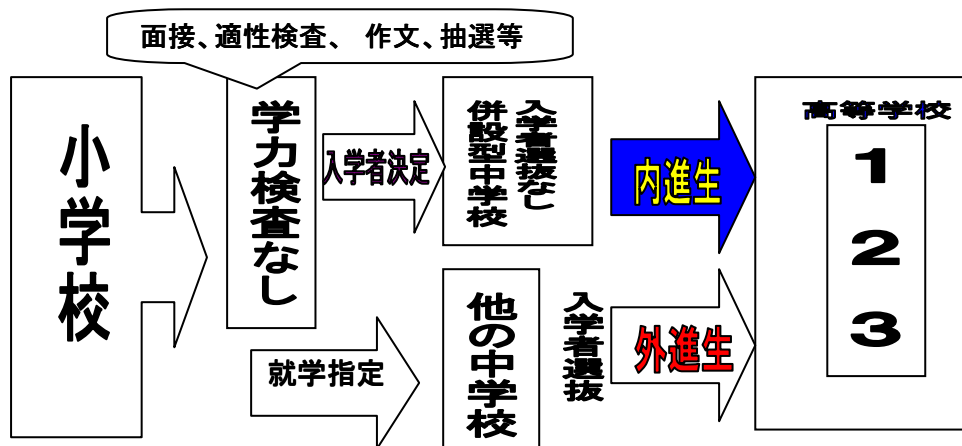
<各形態別の特徴とメリット・デメリット>

1 中等教育学校



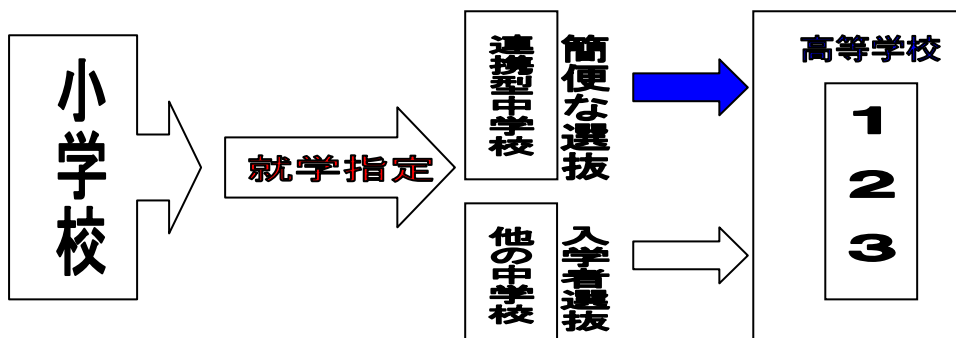
- 外進生がないため、教育課程の基準の特例を活用しやすい。
 - ・高等学校(後期課程)から中学校(前期課程)への一部移行を行っている学校が圧倒的に多い。
 - ・中学校段階では「選択教科の授業時間数の拡大」の特例(H24新教育課程導入により廃止)が「選択教科による必修教科の代替」の特例よりも多く活用。
- 異年齢交流による生徒の育成については最も成果が大きい。
- 教育活動全体にゆとりが生まれ、体験学習の取り入れが可能である。
特に高校受験の時期にさまざまな体験学習を取り入れている学校が多い。
- 保護者の満足度が高い。
- 地元の公立中学校への影響が大きい。
- 生徒間の学力差について苦慮＝特に公立では中学入学時に学力試験がないため、幅広い層の入学者が存在している。
また、高校受験がないことによる中だるみが生じる。
- 教職員の負担が増している。(授業内容・行事等の打合せ、教材研究等)
特に、教材研究については中学校から高等学校までの教材研修が必要である。

2 併設型



- 教育課程の基準の特例を活用しやすい。
 - ・高等学校(後期課程)から中学校(前期課程)への一部移行を行っている学校が多い。
- 異年齢交流による生徒の育成については成果が大きい。
- 教育活動全体にゆとりが生まれ、体験学習の取り入れが可能である。
- 保護者の満足度が高い。
- 3つの型の中では教職員の負担が最も少ない。
- 地元の公立中学校への影響が大きい。
- 内進生の生徒は高校入試を経ないため、中学入学時点での学力差が一層広がる可能性がある。
- 更に高校入試を経て入学してきた外進生との学力差が非常に大きくなる可能性があり、指導に支障をきたす場合がある。
- 中等教育学校に比べると、教育課程の基準の特例の活用が難しい(内進生と外進生に分けた教育課程の編成が必要な場合がある)。

3 連携型



- 主に都道府県立高等学校と市町村立中学校の連携により設置され、既存の中学校・高等学校を活用して一貫教育を実施するため、導入が容易である。
- 特に校舎等の新築・改修の必要性がない。
- 離島や山間地域など、過疎化が進む地域において、単独又は複数の中学校と高等学校が連携することにより、地域振興などの役割も担う。
- 中学校と高等学校の距離が離れているという物理的な環境の下で中高間の連携・協力を図らなければならないため、教員への負担が大きい。
- 連携先の中学校から高等学校への進学率が高くない。
- 複数の中学校から入学者のある高校では連携中学校との教育課程上の特色及び内容面での調整が難しいため、行事等での連携にとどまってしまう。

特徴	中等 教育 学校	併設 型	連携 型
メリット			
高校入試の影響を受けずに「ゆとり」のある学校生活を送ることができる	○	△	×
6年間の計画的・継続的な教育指導が展開できる	◎	○	×
6年間にわたり生徒を継続的に把握でき、個性の伸長や才能の発見ができる	◎	○	×
学力の定着・向上	◎	○	△
異年齢交流による生徒の育成効果がある	◎	◎	○
教育課程の基準の特例活用が可能である	◎	○	×
ゆとりによる体験学習の取り入れができる	◎	○	×
既存の学校の活用が可能である	△	○	◎
保護者の満足度が得られる	◎	○	×
中等教育の多様化・複線化、生徒・保護者の選択肢の幅が広がる	○	◎	△
教職員の意識改革・指導力の向上が見込まれる	◎	○	○
地域との連携を生かした教育の重視	×	×	○

◎＝十分な成果があがっている ○＝かなりの成果があがっている △＝多少の成果がある
×＝あまり成果はない

デメリット			
受験競争の低年齢化を招く	●	▲	◎
受験準備に偏した教育が行われる恐れがある	●	▲	◎
心身発達の差異が大きい生徒を対象とするためきめ細かな配慮が必要である	○	○	◎
生徒集団の長期間固定化による弊害がみられる	○	◎	◎
高校入試がないため中だるみが生じる *1 *2	▲	▲	●
教職員への負担が大きい	○	◎	●
地元中学校への影響が大きい	●	▲	○
生徒の学力差について苦慮している	●	●	▲

●＝弊害が大きい ▲＝弊害がある ○＝それほど弊害はない ◎＝ほとんど弊害はない

*1 連携型の場合、高校入学時に簡便な入試(面接・作文など)しか行わないため、連携以外の中学校からの入学生と比べて学力・意欲の面で大きなギャップがあると考えられる。

それに対して、中等教育学校と併設型においては確かに中だるみは生じるが、入学時に高い志を持って入ってくる生徒が多いため、指導上連携型ほどの苦慮はみられない。

*2 「中だるみ」を単に学習意欲の低下と捉えるのではなく、まさに中等教育の段階で迎える重要な思春期の心の葛藤や不安定さであり、発達上大切なものであると捉えるべきであるとも考えられる。